

【余命3か月の
ウソ】

近藤誠

がんが恐ろしい
のではない。
「がんの治療」が
恐ろしいのです。



近藤誠……放射線ガン治療の専門医から抗ガン剤の使用を戒める。……ガンで死ぬのはある意味自然ですが、治療で死ぬのはやはり不自然ですね。

存率 日 石原

99
9
禁
が
NO



免疫学と血液学の2大権威が対談形式でガンに対する心構えやガンの仕組み、食事療法等について語り合う。薬や手術を避け、日常生活の改善だけで健康を手に入れる方法を。

……医者は自分に抗癌剤を使うのでしょうか？

僕は、慶應大学病院の外来で最長23年以上にわたり、「がんを治療しない」患者さんを診てきました。全部で150人以上に及びます。その中に、初診にふつうに歩いてみえて、3カ月どころか1年以内に逝ったというケースさえ、ひとつもありません。

スキルス胃がんは悪性度が高く進行が早いとされ、見つかると同時に「余命3カ

がん治療で余命3カ月に

2冊の本を紹介

以前、本照寺だよりにて『患者よ、がんと闘うな』近藤誠・著を紹介しましたが、近藤医師は常に患者の側に立ち、『がん放置療法のすすめ』『成人病の真実』『よくない治療、ダメな医者から逃れるヒント』『どうせ死ぬならがんがいい』『医者に殺されない47の心得』や、ほか多数を出版。そしてこのたび『「余名3ヶ月」のかう』と題した新刊を発表しました。

私は立場上、お檀家さんが亡くなると、その状況をお尋ねするのですが、そんな経験上、近藤医師の発言に「そうだな」と思うことが多くあります。今回は2冊の本、『「余名3ヶ月」のウソ』と『ガンが逃げ出す生き方』から抜粋、紹介いたしました。

も多い。痛みが出てもコントロールできます。

中村勘三郎さん

思い出してください。ス
キルス胃がんの大手術から
3カ月で逝った、ニュース
キャスターの逸見政孝さん。
肺がんの抗がん剤治療を始
めて2カ月半で逝った、芸
能リポーターの、梨元勝さ
ん。食道ガンの手術から4カ
月で逝った、歌舞伎役者の
中村勘三郎さん。
きのうまで活躍していた

がんが恐ろしいのではない。「ガンの治療」が恐ろしいのです。世間には、「がんは放つておくとみるみる大きくなり、全身に転移して、ひどい痛みにうめきながら死に至る」という強い思い込みがあります。だから「がん」と言わわれると「早く切らね

ば」とあせり、余命宣告に震え上がって「命が延びるなら、なんでもやります！」と、医者に命を預けてしまう。医者の思うツボです。

もエアコン無しで乗り切りました。独り乗車の車でも。ただ一日中エアコンを浴びていると身体が慣れてしまいます。8月、横浜で葬儀があり、午前7時～午後4時までエアコンの中。帰宅すると33度になりました。思わずエアコンにつきました。でも慣れから身体を戻すため翌日からまた無しとした次第。(時々使わないと故障するようです)

正直者はバカを見る。
しかし不正直者は
もっとバカを見る。

医師が何らかの治療をするために、患者を説得したいだけなんです。3ヶ月長生きできるというのは、説得するための材料でしかないんです。

抗ガン剤治療がいかに過酷かということを、多くの医師が気付くべきです。でも、現場の医師に向けて、「もしあなたがガンになつたら抗ガン剤治療を受けますか?」というアンケートをとつたところ、99、⁹₅₁の医師が受けないと答えた、と言う調査結果を載せた本が最近出版されていました。抗ガン剤で白血球がやられ、肺炎で亡くなる患者も多く、うかつには病院に行けない時代です。(反論される医師もいることでしょう・須藤教裕)

方便で言つてゐるだけなんですね。普通に考えたら、つらい目にあわせて長生きするなんて考えられません。

編集後記

「ひとりで見る夢は、ただの夢。みんなで見る夢は現実になる」 オノ・ヨーコ（日本）